

## いもせ語義弁証

源氏物語等の解釈に触れて

原田芳起

## 一

本誌第五号所載の拙文『宇津保物語登場人物論拾遺』において、  
いもせ川住まざるぬるやどゆゑに涙をもなほ流しつるかな

という和歌一首を一条殿の北の対に書き残して去った女性が、明らかに色好み藤原兼雅の異母妹であり、兼雅との間に異母兄妹の間で愛しあうようになり、兼雅がひそかに一条に迎え取ったという設定のもとに描かれた女性であったことを証論した。証論というより、物語が詳細に二人の関係を語り尽くして疑問の余地もないのであることを説明しただけである。

従来、解釈をまげたり、本文を改変したりして、この北の対の君のことは理解されず、系譜にもその所を得ないままに放置されたのであるが、それは、

北の対におはするはいもうとなり。右のおとど・大殿のあな  
たの一つ御腹のおとうと、はらからなれど異腹ことほちにて疎うとかりける  
を、いもうとむつびして迎へ取りて通ひ給ひしなり。(蔵開下、  
角川文庫版中巻三六八頁)

を正しく解釈し得なかつたことによる。右の引用文の「右のおとど」は源正頼、「大殿のあなたの」は下に「北の方」を補って解すべきで、「藤原の君」に「時の太政大臣のひとり娘」として紹介され、大宮に対して、「あなたの御方」と区別して語られた人である。この人が兼雅の姉であることは『国護下』でも、当の兼雅が明言している。

そこで、問題は、北の対の君の歌の「いもせ川」の意味する所である。「いもせ」を、ただちに夫婦の間がら意味すると考えるのは、後世においては自明のことの如くになっているが、中古におい

てもそうであったと考えることには、少なくとも問題がある。「いもせ」が「いもうと」「せうと」と呼びあえる人間関係であるとするれば、中古においては、男性に対してその姉または妹が長幼に関することなく「いもうと」であり、逆に、女性に対してその兄または弟が長幼にかかわらず「せうと」であったのだから、兄と妹、または姉と弟の関係が「いもせ」と呼ばれることの方が、はるかに自然である。中古にさきだつて既に「いもせ」の語義が後世のように夫婦の意に固定していたと見ることができれば話はおのずから別であるが、この点はあとで章を改めて述べる。『蔵開下』の「いもせ川……」は、明らかに「いもうと——せうと」の間でありながら恋愛し、結婚してしまつた。異常な宿世を歌枕によそえたものであつた。

兄妹の間で世間をはばかりながら一所になつた、しかも永続することもなく、君は私を棄ててここにも来なくなつてしまつた、そんなはかない宿であつたものを、やはりあきらめきれず、随分泣かされました。

およそ右のような意味の歌であることは疑う余地はない。これが『宇津保』の孤立した例であるならば、右の私の解釈が強引にすぎるとの叱責も受けかねないが、類似の歌が、『後撰和歌集』に二例ある。拙文に注の形で補記だけはしておいたが、もう一度、引用して解説を試みておく。

はらからどち、いかなることか侍りけむ、よみ人しらず  
君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける

(秋下・三八〇)

部類を秋にしているから、必ずしも二人の間に恋愛とか結婚とかの関係があつたとは限らない。むしろ、兄妹または姉弟として普通にむつまじい間であつたのに、何かの事で感情的な隔たりが生じたと解するのが妥当である。君と我とは「いもせ」の中であるのに、やはり愛情がさめてしまつたというのであろう。

はらからのなかに、いかなることかありけむ、つねならぬさ  
まに見え侍りければ、  
よみ人しらず

むつまじいもせの山の中にさへへだつる雲のはれずもあるかな  
(雑三・一二一五)

これも部類は雑であるから、前の歌と同じく、これまでむつまじかつた兄妹か、姉弟の間に、急に感情の疎隔を生じた場合が想定される。これらもまた、『宇津保』の例と同じく、はらからどちの恋を意味すると取つて、旧稿の注に「後撰和歌集に見えるいもせの山が二例ともきょうだい同志の恋を歌っているは大いに注意すべきである」と書いたのは、すこし軽率であつたので、解釈を改めることにする。

## 二

旧稿では、『宇津保』『後撰』の例以外には、言及することをひかえたが、他の作品の中にも、「いもせ」が必ずしも夫婦を意味しない例が、まだまだ存在し、この意味論的追求は拡大されるのではないかという予想は、私の中にあつた。最近、大阪府婦人会館にお

ける源氏物語友の会での講義を続けているうちに、『初音』の巻、源氏のおとどと花散里との間がらを描いた、

年月にそへて御心の隔てもなく、あはれなる御なからひなり。

今はあながちに近やかなる御ありさまもてなし給はざりけり。いとむつまじくありがたからむいもせの契りばかりきこえ

かはし給ふ。(角川文庫源氏物語第四卷一五八頁)

という一文に読みいたって、ふとまた、従来の解釈にいきさかの疑念を持つようになった。そのついでといつては変だが、似たような表現をもつ『末摘花』の、

「平中がやうにいろどりそへ給ふな。赤からむはあへなむ」と  
戯れ給ふさま、いとをかしきいもせと見え給へり。(同第二卷  
四七頁)

のくだりも、再度読み返してみると、これまでの解釈には、これまた抵抗なしには従いがたい気持を捨てきれなくなって来た。

『蜻蛉日記』の、

いもせ川昔ながらの中ならば人のゆききの影は見てまし(角川  
文庫蜻蛉日記一六八頁、登子の歌)

よしや身のあせむ嘆きはいもせ山なかくく水の名もかはりけり  
(同一六九頁、作者の返し)

についても、旧稿を書いた当時から、折を見て解釈を再整理してみたいと思っていた。

いま、これらの疑雲を何とか吹き払えないものかと、おぼつかない模索を試みる。

### 三

『末摘花』の「いとをかしきいもせと見え給へり」については、『河海抄』に、

いもせはいもうと、せうと、をいふ也。伊弉諾伊弉册兄弟はじめて夫婦と成給しによりて、夫婦をいもせといふなり。

と注してあるのが、まづ注目される。兄妹がはじめて夫婦となったから夫婦を「いもせ」というという説明は、語史的には正しくないが、源氏物語のこの後の注釈は、ほとんど例外なく、『河海抄』の「夫婦をいもせといふ」に従って来た。谷崎潤一郎訳でも、「全く面白い御夫婦のやうにお見えになる」としているし、池田亀鑑博士の『新講源氏物語』も、「実に似合の夫婦とお見えになった」である。与謝野晶子訳では、「二人は若々しく美しい」と、ここはどうも逃げてしまっている。

この場面、少女は十歳になるかならないかという幼年であり、男は十八歳ぐらいの青年、姫がひいな遊びをして、絵などかいて彩色したりし、源氏も手を加えてやりたりしており、源氏が自分の鼻に紅をつけたりして、たわむれあっている。どうも、似合いの夫婦とか、面白い夫婦とかいような感じではない。姫の「眉のけざやかになりたるもうつくしう」といった感じも、むしろ結婚した女と見えるなどはいえそうもない。これは、一見した所、美しい兄と妹とが、無心にたわむれあっているという方がふさわしいのではなからうか。作者のこの草子地的評言の真意は、「夫婦と申すにはまだ

程遠いもので、一見した所ではお美しくむつまじいもうとせうと——兄妹の間がらというにふさわしいものでございました」というのであったと思われる。

## 四

『初音』の巻の「いとむつまじくありがたからむいもせの契りばかりきこえかはし給ふ」については、前条の例以上に、従来解釈に強い抵抗を感じさせられる。それが、筆者だけの偏執ではないかということ、いくたびも反省し反省しているのだが、疑雲はますます濃くなって来る。この「いもせの契り」が「夫婦のえにし」と解すると、これに続く「ばかり」という副助詞の限定が、どうも不自然に響く。また、すぐ上に「今はあながちに近やかなる御ありさまもてなしきこえ給はざりけり」とある。共に夜をすごすような関係は、もうほとんどなくなったことを明らかに語っている。それがどうして「むつまじくありがたからむ夫婦の間がら」と言えるだろう。これはむしろ夫婦でありながら、完全な結婚関係とは見がたいものである。それに右に触れた「ばかり」の意味であるが、この形態では、「いもせの契りほど——その程度に」という限定としか解し得ない。これを「兄と妹との間がら」「いもうとせうとしてのお睦ぎ」と解すると、「ばかり」がよくその意味機能を發揮する。

『河海抄』の注は、二つの見解の間で迷っているようである。

いもせのちぎりばかり、妹兄イモセ日本紀妻妹万葉いもせとは、日本紀

のごとくは、伊弉諾伊弉册尊兄弟夫婦と成給へる因縁也とあるまでは、『末摘花』に注したと同趣で、夫妻説の方に近く考えているらしい。だが、この下に、

いもうととせうと、云心也云云、されば蘭(ふらば)巻に、岩もる中将玉鬘君を、いもせ山ふかきみちをばたどらずてをだえの橋にふみまよひけるといへり。はじめは姉妹ともしらずで尋つるにも、実にはいもうとにてありけるとよめる也

と注しているくんだりでは、『初音』の「いもせ」をも兄妹の意に解しているようにも取れる。またこれに続けて、

一説云、いもせはいもとせと云心也云云。兄弟夫婦事、高津内親王(桓武御女、嵯峨女御、他腹、即位廢之)又仁徳天皇依菟菟皇子之遺言、彼一腹の妹を女御とし給、淡海公妹五十重夫人為妻、他腹。漢朝には同姓猶不嫁云云。

とあるのは、「いもせ」を兄妹ないし姉弟間で夫婦となったものと解しようとしたものようである。要するに『河海抄』は見解を一つに定め得ないままに注していることになろう。

『湖月抄』は、『弄花抄』を引いて、

とまり給ふ事はなけれども、年比のごとく夫婦の契斗は今もかはらぬと也

としている。だが、右のように解するには、「いとむつまじくありがたからむいもせの契り」という表現は無理である。

『谷崎源氏』では、

ただたいそうお睦えにしじく、ちよつと類のない妹背えにしだけを続け

ていらつしやるのです。

と訳してある。「ありがたからむ」を「類のない」とした所に苦心の見える訳ではある。夜床を共にすることもない夫婦を、その意味で「類のない」というならば、どうも「いとむつまじく」となじまないのが、大いに気になる。今は近やかなることもなく、ただ、いともむつまじく、たぐいまれな、というならば、それを自然に受けるには、「いもせ」をその一義であり、平安時代ではそれがむしろ一般的な語義として定着していた「いもうとせうと」即ち「兄妹」「姉弟」の中、と続けるのが自然である。

『与謝野源氏』では、

しかも精神的には永久に離れまいと誓い合う愛人同志である。とされているが、原文の持つ意味からは、すっかり離れた理解になっている。

佐成謙太郎氏は、次のように訳された。

そうして、誠に睦まじく、世にその例が少なからうと思われような夫婦のむつまじく言だけはかわしていらつしやつたのである。

もはや寢室を共にすることもなく、ある距離を置いて淡々とした交情が、はたして、世にその例が少なからうと思われる程むつまじい夫婦のむつまじく言と一つになるであらうか。

玉上琢弥博士の『源氏物語評釈』では、次のようにこの二人の心情を説明しておられる。

お互いに信頼し合っているのである。以心伝心の二人である。

「今はあながちに近やかなる御ありさまもてなしきこえたまはざりけり」と言う。寢床をともにすることもない、と言うのである。それでいて、二人は信頼感で結ばれている。互いに口にもする、と言う。「ありがたからむいもせの契り」である。

「信頼感」でいよいよ固く結ばれてゆく男女、源氏と花散里とのこの時点の間からは全くこの評にびったりしている。だが、それはむしろ夫婦というよりも、比類なく睦じい兄と妹との親愛感に近くなっていたと、作者は批評したのではなからうか。

##### 五

『源氏物語』に現われる「いもせ」の残る一例は、「藤袴」のそれである。それは「いもせ山」という歌枕として用いられているが、その中に「いもせ」の当時における語義が生きていることは申すまでもない。「いもせ山」という山を詠じたのではなく、「いもせ」の間がらであることを知った兄と、知ってはいだが公表できなかった妹とが、自分たち二人の間を、「いもせ山」なる歌枕に託したものであり、前述した「後撰」の「いもせの山」の二首の例と全く同じである。

「柏木」と便宜上われわれが呼んでいる男性は、「玉臺」とこれも便宜上呼んでいる女性を、自分の異母妹とは知らず、源氏のおとどの娘と信じて求婚し、たびたび消息を送ってきた。玉臺は兄と知っているから、兄としての信頼感を抱いて、つかずはなれずふるまってきた。その玉臺が父の内大臣と親子として対面し、柏木はやっ

と実情を知ったのである。この兄が妹に言いやった消息に付した一  
首、

いもせ山ふかき道をば尋ねずて、をた緒絶えの橋にふみまどひける  
であり、妹からの返しは、

まどひける道をば知らでいもせ山たどしくぞたれもふみ見  
し

であった。「河海抄」も、右の柏木の歌について、

いもせとは日本紀に妹兄とかけり。いもうとせうと也。(中略)  
頭中将玉かつらを日来は兄弟ともしらで恋しつるにいまはあら  
はれぬればふみまどふといふか。

と注して、「いもせ」が「兄妹」の意であることを認めてい  
る。「湖月抄」は「細流抄」を引いて

いもせは兄弟をいへり。兄弟ともしらで文など参らせたるよと  
也。をだえの橋には心はなし。たゞふみまよふといふ、恋によ  
せたる也。(下略)

と注している。「緒絶えの橋」に「心はなし」と注している点は正  
しくないようだが、この「藤袴」の贈答歌の解釈には問題はあるま  
い。ただ、「源氏物語」に現われる「いもせ」の全用例が、兄と  
妹、または姉と弟の間がらを意味していると見なすことができるこ  
とが、これで明らかになつたわけである。

## 六

『蜻蛉日記』の「いもせ川」「いもせ山」が指向する「いもせ」

の意味にも、困難な解釈の問題がからんでくるので、急に大方の賛  
同を得ることはできまいかと思うが、一応の私見を述べておきた  
い。

いもせ川昔ながらのなかならば人の行き来の影は見てまし(前  
出)

について考えると、この歌には、この歌の作者藤原登子とその兄兼  
家と兼家の妻としてのこの日記の作者と、この三者が関係してい  
る。「いもせ川」が歌枕であることは申すまでもないが、そこに  
「いもせ」と呼ばれるべき人物関係がこめられている点がより重要で  
ある。「いもせ」が夫婦を意味するとすれば、それは兼家と道綱母  
との関係であり、それが昔ながらでなくなったことを言っているこ  
とになる。二人の間にトラブルが絶えずあり、昔ながらの中でなく  
なっているという条件は満たされている。だが、「いもせ」が兄と  
妹との間を意味するとすれば、兼家と登子との中を意味し、これも  
このきょうだい仲が悪くなっていた事実があるらしいから、昔なが  
らの仲でないという条件を満たすことは可能である。前者に従うな  
らば、柿本燹氏の『蜻蛉日記全注釈』に、

昔どおりのご夫婦仲でしたら、兄の通いは絶えないでしょう  
に、兄が訪れぬのは、不仲におなりのゆえ、早くもとの仲にも  
どりますように。

とあるのに従うことになる。もし後者に従うならば、

以前は兄の邸宅に近い所に里帰りしたこともあり、兄があなた  
の所に来通うのもよく見ていたのですが、その兄とも昔ながら

の中でもなくなつて、兄の動静も存じませず、あなたがどれ程のお氣持でたびたび山寺にこもつたり遊ばすのか、心配です。

という程の意味に取ることができよう。文の文句には「などは、さ繁さまさるすさびをもし給ふらむ」と、作者道綱母の夫君への不信に、思いすぎ行きすぎがあるのではないかと、やわらかに注告している趣きが見える。その次に続けて、「されどそれに障り給はぬ人もありと聞くものを」は、私の解釈では、兼家が道綱母のこじれた感情にも負けずに、山寺に足を運んで飄意をうながしたのは、必ずしも愛情の無さを示すものではなからうということを書いて、作者をなだめようとしたものと見たい。それに続く「もて離れたるさまにのみいひなし給ふれば、いかなるぞと、おぼつかなきにつけても」も、兄にまだあなたへの愛情があると信ぜられるのに、それにもかかわらず、あなたはつつ離したようにばかり仰せられるそのので、どんなお氣持かと心配で、それにつけても」と、ここでさきの歌にかかつて行く文脈と解される。その歌にいう所が、「夫婦仲が昔のままだったら」では、「兄も影を見せるだらう」に、あまり当然すぎて、とり立てる所がなくなりはしなからうか。それより、私さえ兄との仲たがいなどがなかったら、兄の真意を読み取ってお伝えもできるし、兄のあなたの所への通いもとだえたりしなくもなろうと、和解を勧めているのではなからうか。登子は、道綱母がまだ山寺にこもっているものと思つて書いたのであったから。

道綱母の返しの歌、

よしや身のあせむ嘆きはいもせ山なか行く水の名もかはりけり

についても、「いもせ」に夫婦の間がらを意味させるならば、『全注釈』の

夫の愛の薄くなるのを心配して嘆いておりますが、それはどうにもいたしかたのないこと、なりゆきに任せるほかございませぬ、それにしても、妹山背山の間を流れてゆくよしの川という名も変つてしまいました、昔の円満さはあとかたもなく……。

という、きわめて周到な解釈に従うべきであるが、第二句までと第三句以下との間に、何かすさまじい風が吹き過ぎてゆくような、不安が全くないではない。

この歌の構成は、「よしや身のあせむ嘆きは」と「いもせ山中行く水の名もかはりけり」と二つのセンチンスによって組まれていく。もし一つにまとめるならば、「いもせ山中行く水の名もかはりける世なれば、わが身一つのおせ行く嘆きなどは取りあけるまでもなし、よしや嘆かじ」ということになる。とすると、これも、「いもせ」は登子と兼家の関係をさし、むつまじかるべき兄妹姉弟の間の肉親愛でさえ、流れては変わりゆくものであるとすれば、はかなく結ばれたに過ぎなかった私一身の嘆きなどは思つてもせんないこと、と詠んだと解することが、十分可能であるし、一首の歌意の緊密さも失われずにすむと思う。

七

「いもせ」は、「いもうと」「せうと」の二語の上に立つ。平安時代には、「いもうと」が、妻たる女性を意味した用例は全くな

い。同様に、「せうと」が夫たる男性を意味した用例も全くない。「いもせ山」「いもせ川」が単に歌枕として読まれて、人物関係が証明しがたい例、たとえば、

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中(古今恋五)

かつ見てもまどはれけるはゆきかへりいもせの山のをちこちの道(元輔集)

むつまじきいもせの山と知らねばや初秋霧の立ち隔つらむ(拾遺雑秋)

いもせ川なびく玉藻の水隠れて我は恋ふとも人は知らじな(古今六帖三)

み吉野の山の下風寒からしいもせの川も波高く見ゆ(伊勢集)などを見渡しても、「いもせ」が夫婦を意味する語であったことを証明する積極的なものはない。

『枕冊子』の

くづれよるいもせの山の中なればさらによしののかはとだに見じ(古典全書本八〇段)

は、作者が則光に贈った歌、そして二人は、互いに「いもうと」「せうと」と呼び合つた中である。ということ、二人はかつては夫婦であったが、現在はそうではない、しかし離婚してもむつまじくして行きたい、そこで、互いに「いもうと」「せうと」と呼ぶことで、兄妹のごとくに交際して行こうとしていたのである。「いもせの山」は二人が昔夫婦であったことを示すものでなく、現在はっ

きり離婚していて、兄妹に擬して交際していることを示したものであった。どちらからもなく相奢って「いもうと——せうと」の約束したにすぎないのだから、あなたがそう言う(仇敵と思うなど)のなら、もう決してあれがあの人などと見ることもいたしませんまい、と言つたものらしい。

『和泉式部集』に、

同じ頃、せうとにせむといひたる人の久しう音せぬに、

いつのまにいくへ霞の隔つればいもせの山のかたは見えぬぞとあるのも、同じような例であろう。「せうとにせむ」とは、和泉式部がその男性を「せうと」にしようとする約束したので、当然、自分もその男性の「いもうと」となろうと契つたのである。だが、「夫にしよう、妻になろう」と約束したとは思われない。それならそれで別な表現があるので、わざわざ「せうとにせむ」など言うことはない。夫婦になるのではなく、兄妹(または姉弟)のような間で親しくしてゆこうと約束したものと解すべきである。その意味で「いもせの契り」をしたのである。「いもせの山」という歌の中に、「いもせ」と契つた二人の間をよそえたことは疑うべくもない。

もう一例、『狭衣』に、

行き帰り心まどはすいもせ山思ひ離るる道を知らばや(巻三)

というのがあつた。主人公狭衣の大將が、恋しく思う人、源氏の宮に對する断ちがたい思いを詠んでいる。二人の間は実の兄妹ではないが、もちろん夫婦の関係でもない。源氏の宮は先帝の皇女だが、狭衣の母なる堀河の上の養女として、狭衣とは兄妹として成人したの



であるから、往くにつけ帰るにつけていもせ山を見ると、むつまじく近く育ってきた「いもうと」のことが心を離れない、と嘆いているのである。

このように、中古の文学に出てくる「いもせ」ないし、それによって歌に詠んだ「いもせ山」「いもせ川」で、明瞭に夫婦関係を指向している例には、なかなか遭遇しない。

わづかに、時代がかなりさがって、『清輔集』に、  
年ごろの妻めにおくれたる人のもとへつかはしける

いもせ川かへらぬ水のわかれには聞きわたるにも袖ぞぬれけるが、詞書に「年ごろのめ」とだけあるから、これは、夫婦関係を「いもせ」と表現した例と数えるべきである。

中世に入ると、『平家物語』の、

枕を並べしいもせも、雲居のよそにぞなりはつる。(灌頂卷・女院往生)

あかで別れしいもせのなからひ、必ず一つ蓮はらすに迎へ給へ。(巻九・小宰相)

など、夫婦の意に固定して来る。

## 八

奈良時代には、「いも」「せ」という語が、平安時代とも違し、中世以後とも同じでない。奈良時代までの「いも」は、妻をさす場合もあるが、妻以外の、たとえば姉妹とか、従姉妹とか、男性に対して特にむつまじく近い関係にある女性をさして呼ぶものであ

った。同様に、その反対語としての「せ」は、女性に取って、特に近くむつまじい男性を呼ぶものであって、時には結婚している男性を、時には結婚以前の男性を、時には兄や弟を、または従兄弟を、というように、意味の領域が広い。従って、この時代でも、「いもせ」の語義を夫婦関係を示すときめるのは正しくない。それは夫婦をも含むもっと広い意味をもった語であった。

それが平安時代に入ると、「いも」「せ」という単語は、少なくとも口語からは消え去り、「いもうと」「せうと」という語になったのだが、意味も狭くなって、はらからとしての男と女の関係のみを示すようになったのである。男性との関係においてのみそのはらからなる女性は「いもうと」であり、女性との関係においてのみそのはらからなる男性は「せうと」であった。つまり、「せうと」に対してのみ「いもうと」であり、「いもうと」に対してのみ「せうと」である。それは長幼には全く関係がない。

私がいづも気になるのは、平安文学を今日の用字法によって活字化するとき、「いもうと」に「妹」を、「せうと」に「兄」をあてるのは、誤解を招きやすいから避けるべきではないかということである。

「いもうと」の反対語は「せうと」、「あね」の反対語は「おと」と、「あに」の反対語も「おと」とである。「いもうと」は「あね」との関係では言えないし、「せうと」は「おと」ととの関係では言えなかった。語彙構成が後世と全く違っていたのである。「いもうと」に「妹」の字をあてると、時として、『宇津保』

の俊蔭の母が嵯峨の院の「いもうと」であることは、年立の上で不可能で、物語の矛盾だと考えたりする誤解も生ずるのである。

ここで一つ、不審なのは、『和名抄』の記述である。

妹 尔雅文、女子後生為<sub>レ</sub>妹、音妹、和名以毛宇止

「妹」の字義には問題はないが、それをただちに「以毛宇止」という和名を与えたことは、当時の語彙構成に合致しないのではないかと疑いがある。「和名以毛宇止」の六字、あるいは後人のさかしらな補入ではなからうか。源順がこのような当時の言語事実と明らかに背反する注記をするはずはない。

## 九

『鎮火祭祝詞』にいう、

神伊佐奈俊伊佐奈美命、妹背二柱嫁継給<sub>レ</sub>巨国能八十国島能八十

島乎生給<sub>レ</sub>比

の例は、むしろ奈良時代の言語で理解すべきものであろう。そう解しても、とつき給うた後は夫婦だが、その前は、兄妹に近い、親しい男女の神であつたらう。とつき前からそれは「いも」と「せ」とであつたという表現に取れるので、これで、「いもせ」の第一の意義を「夫婦」とし、第二の意義として「兄妹」をあげる辞書の解説は、適切とは言えない。「夫婦」の意義に固定したのは、平安の末から中世にかけてであることを明らかにしないと、平安文学を解釈する上の指針としては不十分である。

## 補遺

『栄華物語』の「駒競べ」の巻に、「妹背の山云云」の語が見える。上東門院が高陽院殿に行啓、九月十九日駒競べを催され、後一條天皇も行幸なされた。そこで群臣に和歌を召され、慶滋為政が序を書いた。『扶桑拾葉集第一』に「行幸高陽院応制和歌序」として載せている所である。後者の本文の方がすぐれていて納得できるので、抄録してみる。

おほきさきの宮、天の下にみかさ山といただかれたまひ、日の本のはゝき木とさかえおはしましてより、ゆくすえた(お)のもしき事、おほはらの千年の松の風をふきつたへ、朝夕によるこばしき事、ありすがはひとたびすめる水の心のどけき世に、おほくのまつりごとをこなはせたまふ左のおほいまうちきみも、いもせの山の雲へだてなき御なからひなり。(下略)

「左のおほいまうちきみ」は申すまでもなく関白左大臣頼通であり、上東門院とは、はらからである。「いもせの山の雲隔てなき御なからひ」はそれをいったものである。